

(化学物質過敏症 資料)

日本に新しい公害が生まれています。
その名は「香害」

化学物質過敏症で悩まれている、
化学物質過敏症にかかることを心配している皆様へ

2023年8月

合同会社インテションエネジージャパン

合同会社インテションエネジーマーケティング

「その香り、困っている人もいます」と云う消費者庁、文科省、経産省、環境省が作成した、又、「その匂いで困っている人がいます」（静岡県）、「その香り大丈夫？」（東京都目黒区）、「その香り強すぎではありませんか」（つくば市）、等々全国の自治体が作成したポスターをご覧になった方はおられますか。

近年身体に様々な悪影響を与える原因として化学物質から発せられる「香り」が注目されています。メディアでも取り上げられ、8月2日に放映されたNHK「あさいち」では、この問題に悩む人たちの悲惨な現状が紹介されていました。

「香り、香料」が原因で体調不良を引き起こすことから「香害」と呼ばれています。

一. 香害とは

香害とは、香水、合成洗剤、柔軟剤、入浴剤、制汗剤、消臭除菌スプレー、防虫剤、化粧品、芳香剤等に含まれる合成香料に起因し、様々な健康障害が誘発される現象のことです。2008年アメリカのP&G社が柔軟剤の発売を開始、国内メーカー各社も追随し、一時は供給が追いつかないほど人気を得ました。その後、洗剤、消臭スプレー、芳香剤、等々で新製品が続々と発売されました。この様に香り付き製品を好む人が増加していることと裏腹に香りによって健康障害が発生したと云う人も増えており、2012年から相談件数が急増、現在も増え続けています。

香害は、化学物質過敏症要因の一つです。

一. 化学物質過敏症 (MCS, Multiple Chemical Sensitivity)

1. MCSの社会的背景

MCSの研究が本格的に始まってから約50年と比較的新しい疾患です。日本ではMCSの一現象となっているシックハウス症候群が1990年に紹介され、2003年には住宅、教育現場での対応として厚労省から建築材料の規制を含む予防の指針が提示されました。2004年にはシックハウス症候群が、2009年にはMCSが保険病名収載され、両疾患が何らかの化学物質曝露が原因で発症する疾患として位置付けられました。

2. 日本におけるMCSの現状

MCSの罹患率は年々確実に増加しており、国内外の報告では有病率は予備軍含め6~30%、治療を要する重症患者は人口の1~3%となっています。わが国では、有病率は7.5%、重症患者は少なくとも100万人存在すると推定されています。一部の調査では、この10年間で仕事を辞めざるを得ない重症者が3倍増加したことを示しています。

今やMCSは、特別な疾患ではなく、誰もが発症する可能性があると認識する必要があります。MCSは、原因、症状が多岐に亘り、また、MCS専門外来は全国で数か所しかなく、効果的な予防法、治療法は全く確立されていません。その結果、MCS患者の重症化、難治化を防ぐのは極めて困難で、多くの患者が悲惨な生活を強いられています。

一. 環境過敏症 (ES, Environmental Sensitivity) と云う概念

1. ES の定義

ES は、生活環境中の様々な要因と関連して生じる健康障害の総称で、多彩な全身症状を特長としています。化学物質過敏症 (MCS)、電磁波過敏症 (EHS) が含まれており、環境要因として化学的要因 (薬品、食品添加物、塗料、洗剤、柔軟剤、芳香剤、消毒スプレー、除草剤、防虫剤、ニコチン等)、物理的要因 (電磁波、音、光、気圧等)、生物学的要因 (ワクチン、カビ、ダニ等) の三つがあります。

2. なぜ ES の概念が生まれたか

今でも **MCS、EHS は個別の疾患**です。要因は別であっても症状は類似しており、何よりも **両疾患合併の疑いがある重症患者が一定割合存在している**との調査報告があったことで ES の概念が生まれました。

3. ES の問題点

ES の問題点=MCS、EHS に共通する問題点です。

● **過去 20 年間の日本人の生活スタイルの変化が ES 患者を急増させました**。MCS では「香料入り各種製品の普及」が、EHS では「パソコン、スマホの普及」が大きな原因となっています。特に、ウィズコロナ時代は、消毒剤の噴霧やオンライン作業の増加で化学物質曝露、電磁波曝露の機会が増え、患者が急増しています。

● 発生要因、症状が多岐に亘り、発症プロセスは複雑で個人差も大きいいため効果的な予防法、治療法は全くと言えるほど確立されていません。**ES の権威である専門医は、「患者のサポートシステムの構築には時間がかかるので、当面は生活保護、介護保険等を利用すること」を提案しています**。これでは、症状に苦しんでいる患者の解決にはなりません、現実です。

● 予防法、治療法が確立されない理由として専門医療機関、医師が絶対的に不足していることが挙げられます。1992 年北里研究所病院内に MCS,EHS 患者の診察を可能とする世界でも第一級の臨床環境医学センターが開設されました。しかし、空気清浄機の維持だけで年間 600 万円になり、短期間で維持困難になり閉鎖せざるを得ませんでした。現在、日本では少数の専門外来しかなく、経済的、人的問題は深刻です。**MCS、**

EHS 含め ES の研究には、疫学調査が必要です。しかし、要因、症状が多岐に亘り、製品も日夜進歩しているため、膨大な時間と経費が必要であり殆どが実現していません。

● 予防法で必ず第一に挙げられるのは、「発生要因から遠ざかれ、避ける」です。これがどれ程困難なことかはお分かり頂けると思います。これには職場、教育現場、家庭の協力が不可欠ですが、辞職、転職、不登校、転校が増えている現状を見ると簡単ではないことが分かります。香害要因の 1 つである喫煙に関しては、受動喫煙防止法が制定されマナーからルールへと変わりました。しかし、**香り付き各種製品、スマホ等通信機器の製造、使用を規制するのはほぼ不可能**です。このような状況下で我々が目指すべきは「**予防原則的対応**」ではないでしょうか。

一. 予防原則的対応とは

化学物質過敏症（MCS）、電磁波過敏症（EHS）共に一度発症すると、微々たる化学物質、電磁波の曝露で重症化し、長期間影響を受け日常生活に大きな支障をもたらしています。予防法、治療法が確立していない現状では多くの学者、医師が推奨している「予防原則的対応」が重要になっています。しかし、個人が取れる対応は限られています。当社はインテンションエネジー製品の活用をお勧め致します。

一. インテンションエネジー製品とは

インテンションエネジー製品は、アメリカのアヴィレス兄弟が開発したナノバイブテクノロジーを具現化したものであり、日本では18年間の販売実績があります。

1. ナノバイブテクノロジーの開発目的は「化学物質、電磁波、大気汚染等外的要因で不調和になった身体のバイオフィールドを正常な状態に戻し、維持する。利便性を享受している日常生活を変更することなく環境問題との共存を目指し、**予防原則に立つ皆様のお役に立つ**」事です。（ナノバイブテクノロジー、バイオフィールドの詳細は、小冊子「インテンションエネジー」をお読み下さい）

2. バイオフィールドの研究が本格的に始まってから50年で、現在はアメリカの国立衛生研究所を中心に世界各国で研究が進んでいます。その中で、一部の研究者、専門家がバイオフィールドの不調和がMCS, EHS発症に影響を与えているとして研究を進めています。

一. インテンションエネジー製品活用のお勧め

化学物質過敏症、電磁波過敏症共に科学的根拠が確立された予防法、治療法はありません。同様にバイオフィールド不調和の影響も科学的根拠が確立されていない事も事実です。しかし、国内で販売開始以来18年間、様々な疾病で発症予防、重症化回避、早い回復力で非常に多くの皆様のお役に立って来ました。

香害含む化学物質過敏症に悩まれている方々は、予防、悪化防止として「無香料、無添加」の製品を使用する、「匂いを遮断する居住環境の整備」等の対策を取られています。

インテンションエネジー製品開発者であるアヴィレス兄弟、そして多くの学者、研究者は、バイオフィールドの不調和が化学物質過敏症含む環境汚染症に影響を与えているとしております。環境汚染症予防、悪化防止対策の1つとしてインテンションエネジー製品活用をお勧め致します。

※インテンションエネジー製品は病気治癒、予防を目的に開発された製品ではなく、人体のバイオフィールドを正常に維持することが目的です。バイオフィールドを正常な状態に調整、維持することで様々な健康障害に効果があることは実証されていますが、バイオフィールドそのものに個人差があり、効果も個人個人によって異なっています。